

新約聖書 ルカによる福音書 14 章 1 節と 7 節—14 節（新共同訳）

¹安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。

⁷イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。⁸「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、⁹あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。¹⁰招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。¹¹だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」¹²また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。¹³宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。¹⁴そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「お返しができないから」

私たちは誰もが、いつの日か肉体の死を迎え、この地上での生活を終えます。そして、私たち人間が肉体をもっているからこそできることであり、生命維持のために必要なことに、「食事をする」ということがあります。

キリストの福音において、「共に食卓を囲む」ことがとても大切にされています。単に生物としての肉体維持のために食べるのではなく、人と人との心の触れ合いの場として、共に食卓を囲むことが大切なのです。

また、人間だけでなく動物にとっても、共に食べることで互いの絆が深まるようです。動物園の飼育係が、世話をしている動物と一緒に食べると、その動物が自分になつくという話を聞いたことがあります。

しかし他方では、人間社会における「食事の席」は、社会的地位を誇示したり、見栄の張り合いといった窮屈な場になることもあります。

本日の福音書は、イエスが、ファリサイ派のある議員から食事に招かれた場面が記されています。

イエスの時代においても、食事の席は社会的に大切な意味をもっていました。そのため、食事の席における慣習にイエスが従うかどうか、そのような慣習を守ることで招いた人の体面（たいめん）をイエスが保つのかどうか、人々は注目していました。

人々は、誰と食事をするか、そして食卓のどの席に着くかを重視しました。これらによって、食事集う人々の社会的地位が示されるからです。

イエスは、招待を受けたこの食事の席で、客が上席を選ぶ様子に気づき、彼らにたとえを話します。「婚姻に招待されたら、上席に着いてはならない。……むしろ末席に行って座りなさい」と語ったイエスは、あくまで「たとえ」を語ったのであり、食事の席での礼儀作法を教えたのではありません（ルカ 14:8-10）。

ここには、宴会における座席の問題に留まらず、すべてにおけるへりくだりの姿勢の大切さが語られています。さらに、真の名誉とは、自ら勝ち取ろうとすべきものではなく、神から与えられるものであることが示されています。

自らの心がけでは、神の御心に叶った「へりくだる者」となることは難しいでしょう。イエスは、まことの「へりくだる者」として私たちに先立ってくださり、イエスから招かれることによって、私たちはへりくだり、神と共にその低きところに座することができるのです。

イエスが招いてくださる低きところから、神の憐れみの高さを見上げることが真実の喜びです。真実の喜びとは、神を見上げて礼拝にあずかる喜びであり、同時に、私たちのいる低きところに共に立ってくださるイエス・キリストを知る喜びです。

イエスは、招待客に対し、上席ではなく末席に着くように語ったあと、今度は宴会を催す側の心得について語ります。

イエスはまず「昼食や夕食」に人を招く時は、友人も兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼ばないようにと警告します（ルカ 14:12）。

そしてイエスは、そのような限定された狭い枠内における、与えることと受けることの循環にとどまるべきではないと言います。むしろ、お返しができない人々を招くように求めます（ルカ 14:13）。

続いて、これらの貧しい人々を招く者は「幸いだ」と、幸いの言葉が告げられます（ルカ 14:14）。お返しができない人々を食事に招くことにより、招いた人は、人間のあいだのやり取りの循環を断ち切ることができ、神から祝福された幸いな者となるのです。

そして、そのように地上の報いを放棄する人々は、「正しい者たちが復活するとき」、すなわち終わりの時に神から「報われる」と言われます（ルカ14:14）。

人間にとって、食事に招かれるのは光栄なことですが、そこには「招いてくれた人」に対する「お返し」をどうしても意識してしまうところがあります。

また、招く側にも、何らかの見返り、報いを期待しながら招くところがあると、イエスは見通しています。「お返し」を期待することから自由にならないければ、キリストの食事を味わう者にはならないのです。

「ホスピタリティ」という言葉があります。この言葉は、「心からのおもてなし」「深い思いやり」という意味で捉えられています。「ホスピタリティ」は、「見知らぬ人、よその人への愛」を意味します。

また、ホスピタリティとは、身内や親しい者だけで固まって盛り上がり、他者に疎外感を感じさせることとは逆のものであると思います。

ここでイエスは、キリスト者に、貧しい人や障害を持つ人に必要なものを与えよ、と言っているのではありません。イエスは、ホスピタリティをもって彼らを食事に招待せよ、と言っているのです。

食べることは、人間の大きな楽しみの一つです。気持ちが落ち込むようなことがあっても、美味しいものを食べて心が紛れることもあると思います。

そして、その「食べること」が他者と愛を分かち合う時となれば、この地上での生活は、ますます豊かな潤いのあるものとなっていくでしょう。

また、人と共にする食事に限らず、一人でする食事の時も、心の持ち方によって、神とつながる豊かなひとときとなるでしょう。

人間にとって毎日行われる営みである、日々の食事のひとときが「神の食卓」となるように、私たちは祈りと感謝のうちに、共に生きていきましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。あなたは、食事を通して、私たちに恵みを与えてくださいます。あなたの限りない恵みを、隣人と分かち合うことができますように。御子主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 箴言 25 章 6 節—7 節 a（新共同訳）

⁶王の前でうぬぼれるな。身分の高い人々の場に立とうとするな。⁷高貴な人の前で下座に落とされるよりも／上座に着くようにと言われる方がよい。

新約聖書 ヘブライ人への手紙 13 章 1 節—8 節と 15 節—16 節（新共同訳）

¹ 兄弟としていつも愛し合いなさい。² 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。³ 自分も一緒に捕らわれているつもりで、牢に捕らわれている人たちの思いやり、また、自分も体を持って生きているのですから、虐待されている人たちのことを思いやりなさい。⁴ 結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。神は、みだらな者や姦淫する者を裁かれるのです。⁵ 金銭に執着しない生活をし、今持っているもので満足しなさい。神御自身、「わたしは、決してあなたから離れず、決してあなたを置き去りにはしない」と言われました。⁶ だから、わたしたちは、はばかりずに次のように言うことができます。「主はわたしの助け手。わたしは恐れない。人はわたしに何ができるだろう。」⁷ あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。⁸ イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることはない方です。

¹⁵ だから、イエスを通して賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。¹⁶ 善い行いと施しとを忘れないでください。このようにいけにえこそ、神はお喜びになるのです。

教会讃美歌 190 番「主のみ名によりて」、181 番「ここにいます」、375 番「神の息よ」。